

時 の 経 過

河 合 清

Orlando—a Biography (1928) の著者を *Jacob's Room*, *Mrs. Dalloway*, *To the Lighthouse*, *Waves* の作者と同一人物と考えてみる。都合のいいことにすべて同じ著者名で出版されているので、そうすることはそれほど不自然なことと思われなすむだろう。ただ、「オーランドウ」と4つの作品とは、全く別の質をもつことは明らかだ。

「オーランドウ」は形式的には伝記であって小説ではない、と考えることはむずかしい。「形式的に」ではなく「実質的に」V. Sackville—West の伝記であると考え、読者の選択によって可能だ。が、今はサックヴィル=ウェストの伝記であるとはしないで、この作品を形式的には小説、実質的にはほとんどエッセイに近い小説と見る。

「オーランドウ」は伝記の形式をそなえていない。biographer を自称する者があらわれて、伝記の語り方、そしてもっと一般的な事柄らについて説教する。オーランドウの行動がこの（あるいは別の）何ものかによって報告されるかと思うと、オーランドウ自身の考えが披露されたりする。小説として読む時、この何ものかの存在とその見解こそ注目されるべきものだ。4つの作品はこのように語られていなかった。

4つの作品にウルフが使った方法^①は、時の経過について読者に不安定な感じを与えるものだった。「意識の流れ」が時の流れと一致することはまれだからだ。^②人は時についての感覚を持っているが、その感覚を現実のできごとに定着させる能力を十分には持たない。持つ必要がないのだ。常に重要なのは現在と呼ばれる時点と、未来と呼ばれる時間帯での展望とだけだから。時の感覚について、これら2つのものに対応する以上のものを人は持ちあわせない。過去はそのための仮空の時間帯なのだ。が、正にそのために、人は過去のある時点が現在であったと知っている。現在と未来の展望とのための過去、その時点で現在であった時の連続である過去、の間には差があってもかまわないし、実際、差をなくすことは困難だ。どちらの過去を採用するかは作家にとって重大な選択となる。(勿論、区別が明確になされる必要がない場合がありえて、明確でないから区別が全く存在しないとは言えない状況が多くある。)

4つの作品に使われる過去は前者の過去により近い。短い時間を除けば、4つの作品とも殆ど全く時の経過が扱われない。

「オーランドウ」に登場する自称 biographer は、自身が小説家、詩人でないことを確認しながら言う。

Happy the mother who bears, happier still the biographer who records the life of such a one! Never need she vex herself, nor he invoke the help of novelist or poet. From deed to deed, from glory to glory, from office to office he must go, his scribe following after, till they reach whatever seat it may be that is the height of their desire. p. 12

自称 biographer はこの後オーランドウのなすことを「追う」と宣

言しているように見える。事実、彼（そして彼女）のなすことを時間的に追う形で話が進む。が、報告されるのは彼のなすことだけではない。biographerの説教、「なすこと」を越境したオーランドウの考えがまざりこむ。そして、読み終わった時、報告されていたのはオーランドウが「なすこと」ではなく「なしたこと」となっているのだ。つまり、「オーランドウ」で使われていた過去は読み終わる時点で4つの作品と同じ前者の過去になってしまうのだ。そしてすべての文字が「the twelfth stroke of midnight, Thursday, the eleventh of October, Nineteen hundred and Twenty Eight」(p. 228)でのオーランドウを描き出す。なのに、形式上あくまでも時の経過の上へのせられて話が進んでいくのだ。

自称 biographer は初めから本当は biographer ではない。それなのにあくまでも biographer であるふりをする。できごとを時間軸の上にならべた形で語る。

2章で自称 biographer は言う。

; a conclusion which, one cannot help feeling, might have reached more quickly by the simple statement that 'Time passed'²⁸ (here the exact amount could be indicated in brackets) and nothing whatever happened.

But Time, unfortunately, though it makes animals and vegetables bloom and fade with amazing punctuality, has no such simple effect upon the mind of man. The mind of man, moreover, works with equal strangeness upon the body of time. An hour, once it lodges in the queer element of the human spirit, may be stretched to fifty or a hundred times its clock length; on the other hand, an hour may be accurately represented on the timepiece of the mind by one second. This extraordinary

discrepancy between time on the clock and time in the mind is less known than it should be and deserves fuller investigation. But the biographer, whose interests are, as we have said, highly restricted, must confine himself to one simple statement: ⁽³⁾

but がダブっていることが注目される。「時が過ぎた」、そして何事もおこらなかったと言えればいいというのだ。カッコに入れて過ぎた時間の「exact amount」を示すのもいい、とも言っている。その後、but をはさんで時についての妙に平凡な考察が入る。そして、もう一度 but をはさんで関心の対象が極端に限定されている biographer は……と仰いだすのだ。関心の対象が限られている当の本人がこんなことを言うはずもないので何かおかしいことには気づかなくてはならない。

5章にはいると時代は19世紀にはいり、オーランドウとその周囲との矛盾を故意に意識させるような記述がめだつ。時代の風潮がオーランドウからはなれて語られる。彼女の生きてきた長さ、性、などについて今まであいまいにされてきたと思えることが指摘される。それにもかかわらず、矛盾やあいまいな点が解決されることなくオーランドウについての報告が続く。まるで矛盾など存在しないかのように。

—the Widow Bartholomew (who had succeeded good old Grimsditch as housekeeper)… p. 161

—her ambiguous position must excuse her (even her sex was still in dispute) and the irregular life she had lived before.

p. 162

She had been working at it for close on three hundred years now. If was time to make an end. p. 163

Mr. Dupper, who was grown a very old man, ... p. 181

6章にはいると、自称 biographer は読者に尋ねだす。

It was now November. After November, comes December. Then January, February, March, and April. After April comes May. June, July, August follow. Next is September. Then October, and so, behold, here we are back at November again, with a whole year accomplished.

This method of writing biography, though it has its merits, is a little bare, perhaps, and the reader, if we go on with it, may complain that he could recite the calendar for himself and so save his pocket whatever sum the Hogarth Press may think proper to charge for this book. But what can the biographer do when his subject has put him in the predicament into which Orlando has now put us? p. 184

それなら時間軸にのせない方法を教えてくれと言っておいて、そのまま時間軸にのせた形で語り続ける。今では時間めもりは日単位までついている。が、ここまでくれば、もうそれはただついているだけということがわかる。時間めもりとオーランドウについての報告との間には何の関係もない。

オーランドウが300年以上生きてきたとすることができるのは、記述が時間軸と一致していると考えられる時だけだ。初め、記述が時間上にのっているように見える形ではじまっていた時と同じ見方をすれば、オーランドウの生は時間の上で不当に長くのびて見える。報告はその生について切れ切れの端片からなっているのだから、300年余りの時間帯にそれらをばらまくことも可能だったのだ。

記述が時間の上にならぬと見れば（読者はここまでのどこかで、それに気づかなくてはならない。そして、その気づき方は、

おそらく、ある時突然にというのではなく、次第にという形をとるだろう。) オーランドウは300年生きてきたと言うこともできないし、300年生きてこなかったと言うこともできない。描かれていたのは「今」のオーランドウなのだ。

では、もし仮りにオーランドウの生の端片が36年間にばらまかれていたとしたら、オーランドウが子供の時^{とき}男でなかったとしたら、その他これらと同類のすべての仮定が成りたつとしたら、描かれているものは時間軸上にのったオーランドウの生なのだろうか、という疑問が残される。そして、この疑問に「そうだ。」と答えることはできない、というのが *Orlando—a Biography* の作者の立場だと見える。

オーランドウについての自称 Biographer の報告はこの後も同じやり方で進み、彼女が息子を手渡される時、時間が報告される。そしてその直後から、様子が一変する。

'It's a very fine boy, M'Lady,' said Mrs. Banting, the midwife, putting her first-born child into Orlando's arms. In other words Orlando was safely delivered of a son on Thursday, March the 20th, at three o'clock in the morning.

*

Once more Orlando stood at the window, but let the reader take courage; nothing of the same sort is going to happen to-day, which is not, by any means, the same day. pp. 204-205

「同じ種類のことはおこらない」というこの宣言以降、最後までの方は「現在」にあたっている。オーランドウの行動は過去形で報告されたまま。“today” という単語は注目に値する。その日はいつだったのか、と考えれば、実はそれは1928年10月11日だったのだ

けれど、その考えは「今日」を過去の中におしこめてしまうのだ。「今日」は誰かにとって現在なのだ。真の biographer は “today” という語を使わない。

「現在」の中でのオーランドウについての文章は、4つの作品の文章のように読み易い。これらの文章は、オーランドウの過去をも含んでいるが、この過去はもう時間軸の上で使われる過去ではないのだ。それでもまだ、形式は保たれている。自称 biographer の説教は、もうこの「伝記」についての解説になっているのに、時を知らせる鐘の音がうるさいくらいにきこえてくる。もし、無理に鐘の音をたよりにするなら、この「現在」はでたらめのように見える。が、本当は、でたらめなのは鐘の音、つまり「時計の時間」の方なのだ。オーランドウは10時に10回打たれる。

Orlando leapt as if she had been violently struck on the head. Ten times she was struck. In fact it was ten o'clock in the morning. It was the eleventh of October. It was 1928. It was the present moment.

No one need wonder that Orlando started, pressed her hand to her heart, and turned pale. For what more terrifying revelation can there be than that it is the present moment? That we survive the shock at all is only possible because the past shelters us on one side and the future on another. p. 206

この時使われる「現在」は真の意味での現在ではない。もし真の意味で現在であるなら、人はいつも “revelation that it is the present moment” に打たれていなくてはならないはずだ。今の「現在」は、biographer の使う現在、つまり、後者の過去から作り出される別の現在なのだ。オーランドウはもう1度11時にこの現在に打たれる。そして4時に時計がうった時、すべての過去が破壊さ

れ、4時15分に彼女はこの過去の上になりたつ意味での「現在」から解放される。

この過去の破壊は、オーランドウの今までの生がのっていた時間軸の破壊にあたり、今までの描写は現在のオーランドウの描写へとかわっていることが確定される。

Orlando—a Biography は初め、時の経過の上によって書き出されていた。

経過は後者の過去にあてられる表現で、前者の過去に使われる場合には歴史的に見て事実が前後したり、1つに見えるものが複数にわれたりする。さらに、歴史的にはなかったように見える事態が登場する。歴史的でなく見れば、その事態はあったのだ。実は表現が裏返しで、経過をおって、つまり後者の過去を使ってものを見るのはあとからおこることで、そうする時、人はおこっていた事態を時間軸にのせるために組みなおし、一部を削りとってしまう。経過の中にできごとを並らべるためには経過と信じられるような対象を選び、それによりかかることが必要で、経過の中ではできごとは互いにもたれあっているのだ。

オーランドウが書きものをはじめようとする時、biographerが言う。半分以上自分に言っているように。

As this pause was of extreme significance in his history, more so, indeed, than many acts which bring men to their knees and make rivers run with blood, it behoves us to ask why he paused; and to reply, after due reflection, that it was for some such reason as this. Nature, who has played so many queer tricks upon us, making us so unequally of clay and diamonds, of rainbow and granite, and stuffed them into a case, often of

the most incongruous, for the poet has a butcher's face and the butcher a poet's; nature, who delights in muddle and mystery, so that even now (the first of November 1927) we know not why we go upstairs, or why we come down again, our most daily movements are like the passage of a ship on an unknown sea, and the sailors at the mast-head ask, pointing their glasses to the horizon; Is there land or is there none? to which, if we are prophets, we make answer 'Yes'; if we are truthful we say 'No'; nature, who has so much to answer for besides the perhaps unwieldy length of this sentence, has further complicated her task and added to our confusion by providing not only a perfect rag-bag of odds and ends within us—a piece of a policemen's trousers lying cheek by jowl with Queen Alexandra's wedding veil—but has contrived that the whole assortment shall be lightly stitched together by a single thread. Memory is the seamstress, and a capricious one at that. Memory runs her needle in and out, up and down, hither and thither. We know not what comes next, or what follows after. Thus, the most ordinary movement in the world, such as sitting down at a table and pulling the inkstand towards one, may agitate a thousand odd, disconnected fragments, now bright, now dim, hanging and bobbing and dipping and flaunting, like the underlinen of a family of fourteen on a line a gale of wind. Instead of being a single, downright, bluff piece of work of which no man need feel ashamed, our commonest deeds are set about with a fluttering and flickering of wings, a rising and falling of lights. p. 55

針子の「記憶」がむら気なのは過去に現在であった時の集まりを過去とするからで、逆に表現すれば、そのような意味で整然と仕上

がった布袋は、現在にとっては rag-bag なのだ。もう一度裁断しなおして過去を縫いなおせばいいように思えるかも知れない。けれど、それは不可能なのだ。捨てられた端切れが多すぎる。

小説家、詩人の書いたものについて言えばそんな望みはいだかれない。私達は「つくり出される事実」が言葉のあとにくることを知っている。(あるいは、知っているべきだ。)

biographers の書くものについてはどうか。もし言葉が経験をすべて (ありえない部分まで延長した時思いえがかれる終点をさしている) 伝えるなら可能なのかも知れない。けれど言葉はすべてを伝えない。だから “It is these pauses that are our undoing.”⁽⁴⁾

オーランドウ (詩人) も自称 biographer も書きつづけなくてはならなかったのだ。止まらないで。

By all the laws, Memory, having disturbed him sufficiently, should now have blotted the whole thing out completely, or having fetched up something so idiotic and out of keeping—like a dog chasing a cat or an old woman blowing her nose into a red cotton handkerchief—that, in despair of keeping pace with her vagaries, Orlando should have stuck his pen in earnest against his paper.⁽⁵⁾

そして書きあがったものが、自称 biographer について言えばこの *Orlando—a Biography* だというわけだ。後から考えてみれば、針子の「記憶」がむら気だと考える必要はなかったし、女王 (カレンダー) も日付も時計も必要ではなかった。というよりむしろ、じゃまにしかなくていかなかった、ということになってしまう。つまり、この自称 biographer に言わせれば、不完全な言葉で生の端片をならべる以外に手が無い以上、伝記と呼ばれるものは存在しない。し

かも、もし万一伝記が存在したとしても、それが正に「伝記」として読まれることは起こりえないのだ。

だから、ここで小説家、詩人と biographer との区別はなくなってしまう。biographer の書くものについても、事実は言葉のあとにくるのだ。そして、過去は現在のためにある過去以外の過去ではない。オーランドウがデパートで店員を見た時に使われる過去は正にこのような過去と一致している。

—all the polite, black, combed, sprightly shop assistants, who descending as they did equally and some of them, perhaps, as proudly, even from such depths of the past as she did, chose to let down the impervious screen of the present so that to-day they appeared shop assistants in Marshall & Snelgrove's merely.

もし、この店員達の1人について「伝記」が書かれるとしたら、記述は300年にわたるかも知れないし、5年にわたるかも知れないし、期間が表示されないかも知れない。なぜかと言えば、ここで言われる過去はスクリーンの向う側にあって、現在よりも後にあるから。

では、時間軸の上に整然とならんだように見える過去は何なのかと言え、それは針子のむら気を最大限におさえた過去なのだ。ここでいう「むら気」は勿論時間軸との比較で使われてはいない。他の人間の、物書きでいうなら読者の、針子との比較が問題にされている。もし書く側の針子が読者の針子と全く同じなら、書く側にも読者の側にも、何の問題もおこらない。この2つが一致する保証がないから問題がおこる。一致する保証がないと感じられるのは、一人の人間の中に様々な針子が用意されているからだ。もし針子が一

人なら読者にわかろうがわかるまいがその針子を使うしか手がないのだ。

用意された針子の中に割合むら気でないと感じられる針子がいる。つまり、読者の針子の中にもいそうだと感じることもできるタイプの針子がいるのだ。この針子が後者の過去を作り出すというわけだ。ただし、この針子は多量の端切れを出す。端切れの中に伝えたいと感じるものが多ければ、この針子は使えない。この状況を自称 biographer は裏側から書いている。

That Orlando had gone a little too far from the present moment will, perhaps, strike the reader who sees her now preparing to get into her motor-car with her eyes full of tears and visions of Persian mountains. And indeed, it cannot be denied that the most successful practitioners of the art of life, often unknown people by the way, somehow contrive to synchronise the sixty or seventy different times which beat simultaneously in every normal human system so that when eleven strikes, all the rest chime in unison, and the present is neither a violent disruption nor completely forgotten in the past. Of them we can justly say that they live precisely the sixty-eight or seventy-two years allotted them on the tombstone. Of the rest some we know to be dead though they walk among us; some are not yet born though they go through the forms of life; others are hundreds of years old though they call themselves thirty-six. The true length of a person's life, whatever the *Dictionary of National Biography* may say, is always a matter of dispute. For it is a difficult business—this time-keeping; nothing more quickly disorders it than contact with any of the arts; and— pp. 210-211

形式上あくまで biographer であるから、整然とならんだ過去の側

から語っているのだけれど、最後の部分だけは、つい本音が出てしまったのか、本来の側から語ってしまっている。

Orlando—a Biography はこの針子を使って (使った形で) しかも伝えたい端切れを全て縫い込ませた形で書かれている。オーランドウが11時に「現在」に頭を打たれた時から、4時15分に、もう一度生きはじめられる、と考えた時 (p. 211~p. 223) までの間にこの rag-bag は縫い目がほどけて細かな布切れに分解される。初めオーランドウが自分を呼んだ時、オーランドウは来なかった。呼ばれたオーランドウは時間の上にばらまかれていたので、時間の数 (時間軸から見た時の本当の時間の数) だけのオーランドウがいたからだ。時間軸から見れば各々のオーランドウは別の人間だった。意識を持つ自己が、一つの自己でありたいと願うと、オーランドウは車で角を通るたびに変わり始める。そして彼女が「オーランドウ」と呼ぶのをやめて、何か別のことを考えた時、呼んでいたオーランドウがやってくる。ここでオーランドウは1人のオーランドウになり、代わりに多数のオーランドウがのっていた時間軸は切れてなくなってしまう。時間軸がなくなるのに合わせて、今までの過去に多数のオーランドウがとりまかれていた状況そのものもなくなる。その時オーランドウは屋敷の細長い部屋 (過去へ掘ったトンネル) の一番奥のエリザベス女王の椅子 (つまりこの伝記のはじめ) にすわっていた。そして、4時の鐘がこの部屋をこわしてしまう。それでオーランドウはもう一度生きはじめられると考えるようになる。

勿論、この過程も自称 biographer によって書かれているから、本来の順の逆をたどっている。本来の順とは、biographer の使った針子が縫った順のことだ。まず、ありもしない時間軸と状況が用意された。一人のオーランドウがまず先にいたのが、裁断されて多数

のオーランドウが作り出された。ここでは端切れを出すことが許されなかったから、作られた多数のオーランドウは互いに別の人間だった。これらを時間軸に無理にのせて、*Orlando—a Biography* ができあがった、というわけだ。

では伝記とは何なのか、という問に対する答が必要だ。

1つの答は、*Orlando—a Biography* を36年の時間軸の中で拡げてみせたものと同質のもの、という答だろう。それでも「伝記」という言葉を使うというのなら、*Orlando—a Biography* はサックヴィル=ウエストの伝記であると言うことができるかも知れない。

もう一つの答は別のものを指す。正に伝記と言う時に想像される質を持ったものだ。自称 biographer はこのようなものが存在しないと主張するように見える。自称 biographer は二章で、伝記の読者について言っている。

For though these are not matters on which a biographer can profitably enlarge it is plain enough to those who have done a reader's part in making up from bare hints dropped here and there the whole boundary and circumference of a living person; can hear in what we only whisper a living voice; can see, often when we say nothing about it, exactly what he looked like; know without a word to guide them precisely what he thought—and it is for readers such as these that we write— p. 52

このような読者の役をする人々のために書くと言っているが、まず、このような読者が「正しい」the whole boundary and circumferenceを作りあげる可能性がうすい。「正しい」という言葉は小説や詩の場合とちがって気軽に使える。もし仮りに書かれた伝記には全く別のことが書かれていたとしても、「正しい」と呼ばれる

何かが想定されているのだから。さらに、もし正しい想像が可能だとするなら、biographer は事態をふくらまして書いてもいいわけだ。biographer が書くのはヒントにすぎないのだから、正しいものを想像させる限り、ヒントは「正しくなく」でもいいのだ。つまり、自称 biographer はこのような読者のため書いてはいないのだ。「伝記」を正に伝記と考えるとするなら、自称 biographer の態度にしたがえば、*Orlando—a Biography* はサックヴィル＝ウエストの伝記とは言えない。それは、彼女の描写なのだ。時間をおっていないのは勿論のこと、どの時点での、ということすら問題になりえない。

4つの作品と「オーランドウ」の共通の著者の態度はどうかを考えてみる。この著者はウルフという名になっているので、そのままこの名を使うが、確認しておかなくてはならないことがある。まず、「伝記」についての話であるから、ウルフの名がさすものの中に、彼女の伝記やそれと同質のものから来る知識が含まれていないということ。さらに、今は「オーランドウ」をウルフの作品であるとみていること。

自称 biographer の態度をウルフの態度であると考えすることは不可能だ。自称 biographer はウルフの作品の一部分だから。けれども、「オーランドウ」に“a Biography”がついていることは、その分、biographer は作品の外部へおし出されていることを意味する。そこで、外部へおし出された自称 biographer をも含めて作品と見るなら、「オーランドウ」の書かれ方は「トリストラム・シャンディ」の書かれ方と共通する。つまり、何かを茶化しているような書かれ方がされている。

茶化されているものが何なのかを決定する根拠は少ないが、それが伝記や biographer でないことは確実だ。私には、茶化されてい

るのは筋を追う形で進行する小説であると思える。この形の小説は、正に「オーランドウ」の中の biographer が彼等のために書くと言った「想像力を持った読者」のために書かれている。つまり、「何も言わない時でも、しばしば、人物がどのようなものであるか見える」という読者が想定されているのだ。このような「想像力」が信頼のおけるものだとは思えない。「想像力」が想定されているということは、読者の側にも、まず語られる対象が存在していて（現実にという意味ではない）それを言葉で伝えているという前提があるということの意味する。が、現実には、文学作品について言うなら、まず語られる対象が存在している、という事態はおこりえない。語られている対象が言葉の後にあるのだ。

ウルフの4つの作品には、すべてが言葉の後に来るという意識がある。「想像力」をもってこれらの作品を理解しようとするのは、全くばかげているように思える。ただ、4つの作品には時の経過が扱われないという難点がある。4つの作品とも、時自体は扱われている。時の経過が扱われないのだ。それは、時の経過という考えが、この種の「想像力」に大幅にたよっていることによるのだ。

- (1) この方法には「意識の流れ」と名がつけられている。方法につけられるには異常なこの名は、使用する人によっても意味が異なり、又、一人の人間によって使用される場合でも意味が不明確で、ほとんど名の役をしていない。

名にそって問題をあげれば3つになる。

- ・意識とは誰のあるいは何の意識なのか。
- ・何の上を、あるいは何の間を流れているのか。
- ・動かないものは何なのか。（「流れ」は動きを示す。動きは動かないものを指定する。）

以上のことが明確でなくても確かなことがある。意識は何ものかの流

れを含んでいることがあるが、それ自体は流れない。

- (2) 不明確とした名を使ったことには理由がある。「時が流れる」という表現は確かに意味をもつが、「時」は本来、流れないものの側につけられた名なのだ。流れるものについては名がない。
- (3) p. 68 28 の注は正しい。
- (4) p. 56 (these pauses は直前引用の第3語に対応する)
- (5) p. 56 (Memory とは後者の過去に対するもの)
引用のページは新しいペンギン版による。
(Penguin Books, 1993)